

平成28年度 第2回総合教育会議 要旨

日 時： 平成28年12月22日(木) 午後3時～5時05分

場 所： 市役所5階 大会議室

出席者：

構 成 員 藪本市長、里見教育委員長、井口教育委員長職務代行者、
石井委員、浦崎委員、松本教育長

意見聴取者 広野小学校藤本校長、三木東中学校岸本校長
緑が丘小学校山口教諭、緑が丘中学校田中教諭

事 務 局 井上副市長、赤松企画管理部長、西本教育企画部長、永尾
子ども未来部長、藤原参与兼企画調整課長、大西教育政策
課長、横田学校教育課長、岩崎企画調整課特命課長、坂田
学校教育課副課長（企画調整課副課長）

傍聴人の数： 6名

1 開会、あいさつ

（藪本市長）

- ・先だって第1回総合教育会議を開催したところだが、一度では結論に達していない。それだけ重要な案件を扱っている。
- ・前回合意したのは、三木市の教育の基本理念、総合教育会議で決めたことを実行していくため教育委員会が検討会議を立ち上げること、総合教育会議と教育委員会の大まかな役割分担についてである。
- ・また、小規模中学校における教育環境のあり方の方向性、対象をどうしていくのか、どうイメージするのかについても議論したところである。
- ・非常に大きな問題・課題を扱っており、小学校の学力についての意見もいろいろ出てきたところなので、本日改めて総合教育会議として4人の意見聴取者に来ていただいた次第である。

4人の方については、大変お忙しい中来ていただいたことを厚くお礼申し上げたい。

まずは最初に4人の聴取者の皆様に、一点目として小学校、中学校における現状認識として、学力の状況及び各小・中学校がまちづくりを含めて地域とどのように関わっているのか。二点目には小中学校の学力と学校の規模との関係について現場を踏まえてどのように考えているのか。三点目には小規模校のデメリットをどのように解消していくことができるのか、また、どのように取り組んでいるのか。最後に

先生方として家庭の教育力について現場から見てどのように把握し考えているのかについてお聞かせいただきたい。

- ・ 席順に、項目に沿って概ね10分を目安にお伺いしたい。

2 協議事項

三木市がめざす学校教育について

(意見聴取者)

- ・ 小学校として、まず一点目、現状認識ということで学力と学校及び地域との関わりについて。資料にもあるように三木市の学力については、全国平均をやや下回っている、国語・算数共にそういう傾向になっている。昨年度と今年度を比較した場合に、国語・算数両方とも基礎的な部分については改善されているが、活用の部分についてはあまり大きく変わっていないというのが現状である。

改善部分については、授業の始めに、その時間のねらいを明確にし、最後にそれがどれだけ身に付いたかの振り返りをしっかりする授業形態をそれぞれの学校が徹底し、取り組んだ成果だと思っている。

ただ、大きく変わっていない部分に対しては、ドリルなど基礎的なトレーニング、スキルの学習を増やすとともに、活用と言われる思考力・判断力・表現力を授業の中で育てることである。

また、三木市の傾向である家庭学習の時間が短いところ、逆に言うと、ゲームなり他のものに費やす時間が長い傾向にある。

基本的な生活習慣の改善や学校で身につけたものをもう一度家庭でおさらいをするというサイクルを作っていくことがこれからの課題ではないかと思っている。

- ・ 地域との関わりについては、小学校では1・2年生で生活科がある。その中身は3つあり、①自分と社会、②自分と自然との関わり、③活動・表現技法の習得があるが、地域の人にいろいろなことを学んでいく中で、小学校は地域との関わりは非常に深い。

本校は市内で一番大きな学校であり、老人会の方を中心として述べ100人以上の地域の方に学校に来ていただいて、昔遊び、戦争のこと、米作りなどいろいろなことを教えていただいております、非常に地域と密接な関係を築いている。

- ・ 二点目の、学力と学校規模との関係については、三木市内において7校の小規模校があるが、その学校と三木市全体とを比べてみると、全体的に小規模校の方が学力調査の結果は良い傾向にある。一人ひとり

に目が届き易く、指導がし易いというメリットも生かされていると思う。

児童の数が少ないので、子どもたちの学力差が平均に反映されやすいにもかかわらず、平均すると比較的高い傾向にある。

- ・ 三点目の、小規模校のデメリットの解消法は、現在も吉川等で行っているが、テレビ会議などを使って、お互いに交流しながら授業を進めていくことや、一か所に集まって交流授業をしている。

ただ、何回も行うのは難しい、進度を合わせなければいけないなどの課題があるが、現在はこのような解消方法をとっている。

- ・ 四点目の、教師として家庭の教育方法をどう考えるかということだが、文部科学省は家庭の教育力は低下しているのではないかと捉えている。私もそう思う。

ただ、社会的な環境が大きく変わっているので、スマートフォンとかゲームとか、昔に比べて子どもたちへの誘惑が非常に多い。環境の変化に子ども達が、又は保護者がしっかりと適応できてないと捉えている。

基本的な生活習慣、例えば、あいさつや朝ごはんをしっかりと食べるなど規則正しい生活という部分が弱いと思う。基本的な生活習慣や家庭での学習習慣がついてる子どもは、学力が高いことは調査で明らかになっているので、たとえ30分でもいいから机に向かい学習するなど、学習習慣を身につけることがいろんな面で良い結果が出るのではないかと思う。

(藪本市長)

- ・ わかりやすい説明に感謝する。それでは次に、隣席の先生にお願いしたい。

(意見聴取者)

- ・ 一点目の学力については、特に小学校現場では子ども達の発達段階ということを考え、基礎・基本の力をしっかりと定着させることが大切だと考えている。

国語・算数については、各学校で学力状況調査を踏まえ、職員会議、研修会等の場で基礎学力の定着を図るために、どのような授業を行っていけばいいのか協議し実践しているところである。また、基礎学力定着化事業で、各学校で取組の成果を教科ごとの研修部会などを通し、学校間でも情報共有をしている。

- ・次に、学校と地域の関わりについては言うまでもなく繋がりは深いと思っている。

例えば、登下校の安全確保という意味では人の目垣根隊として地域の方にお世話になっているし、朝の学習のときに地域のボランティアの方に来てもらったり、地域の方から米作りやしめ縄作りなどを教えてもらうなど、環境教育、ふるさと学習に協力していただいている。

また、生活科の学習などでは地域の店に出向き学習を進める、学年によっては地域の行事にも参加し、学校の取組成果を発表させていただく等を行っている。このように双方向で地域と深い関わりを持っている。

学校は子どもたちが学ぶだけでなく、PTAの事務局でもあるし、子ども会の活動の場でもある。また、放課後や休日には地域の方々、スポーツ団体の方々が練習場として使っているし、災害が発生したら地域の避難所にもなる。

学校は様々な機能を併せ持つ施設でもあり、施設面でも地域の方々の活動の拠点ではないかと認識している。

- ・二点目の学力と学校規模の関係だが、学校の適正規模を考えるときに、子どもたちが集団の中で様々な考え方に触れ、認め合い、協力し合い、成長していくことが学校教育現場での一番大事なことだが、そういう意味では、ある程度の学校規模が望ましいと思っている。

一方、学力だけ考えると、児童一人ひとりに基礎的、基本的な内容を確実に定着させていくという点では、少人数の授業は非常に効果的だと思う。例えば、1クラス40人近い場合は教科によっては2クラスに分けて20人程度の少人数を活用した授業形態を組むことも、現場では効果的と考え行っている。

- ・三点目は、小規模校のデメリットの解消ということだが、どの視点かにより変わってくるので非常に難しい。

子どものことを中心に考えると、小規模校は人間関係の面で少人数なので繋がりは深いかもしれないが、横への広がりという面、切磋琢磨するという面では、デメリットになる。

これについては、例えば、学年を超えて縦の繋がりをもつことで解消できる。また、施設面では、小規模校の場合は子どもたちを掃除の時に掃除場所に全部配置できなくて、掃除の手が行き届かないというデメリットもある。そういう場合は、例えば地域の方々をお願いをして学校の環境を整えていただくというのも解消方法だと思う。

教師の立場で考えると、子どもたちに目が行き届きやすい面もあるが、

学校の仕事の分担では、一人の教師がたくさんの役割を担っている。そうならば、出張の回数が多くなるなど、学校を離れる分、子どもたちと接する時間が少なくなる。そういう意味では、出張の回数を減らすなどの解消方法も考えていかなければいけない。

教育課程を考えると、小規模校は体育館や運動場が使いやすいが、統廃合し中規模校になると融通が利きにくくなる。運動場も二つのクラスで使ったりすると、子どもたちの活動が制約される。

メリットと思えるところがデメリットになったりするので、今後、色々なケースを想定して解消法を考えなければならない。

- ・ 四点目の家庭の教育力について、家庭は子どもたちが穏やかに過ごす基本となるところだが、仕事をしており子どもと関わる時間が少ないなど、家庭教育に悩んでいる保護者もたくさんいる。

学校として家庭教育についても支援していく必要があると思っているし、現場では何度も家庭に足を運んで、家庭生活と学校生活の情報を共有しながら取り組んでいる。

学習の定着、学校で習得した知識を強化するという意味で、子どもたちの家庭での反復学習の習慣づけが課題であり、教育委員会が家庭での学習の手引きを配布しているので、それに基づいて保護者の方に協力をお願いしている。

学校は、集団における生活や知識を身につけるところであり、家庭は人間関係の基礎となるしつけや感性、豊かな心、身体をつくるところである。お互いの繋がりがきちんとあって子どもたちが成長していくと思っており、十分に連携をとりながら進めていくことが大切だと考えている。

(藪本市長)

- ・ ご報告に感謝する。

特に中規模校も、視点を変えるとメリットがデメリットに変わるということで、少し考えさせていただいた。

それでは、中学校の先生にお願いしたい。

(意見聴取者)

- ・ 一点目の学力の現状認識は、中学の全国学力学習状況調査では、近年、国語・数学共に、県を上回る結果を維持している。その点では基礎学力の定着をしっかりと図っていった結果だと考えている。

ただ今年度は、国語においてマイナスになってしまい、これは大き

な反省点で、国語の教科のみに関わらずしっかり考えていかないといけない。

また、学校と地域との関わりは、中学では土日等の休日にかかなりの生徒が部活動で、なかなか地域に関わることが少ないのが現実である。複数の小学校から入学して来るので地域も非常に広がっているが、垣根隊の方々などがさりげなく中学生の行動を見ていただいて、注意したり褒めていただいたりして、生徒は地域に居るんだと感じる。そういうことから、教師も生徒に対して、地域の方々へのあいさつなどしっかり指導している。

- 二点目は、中学校での小規模校の課題だが、やはり集団の中で切磋琢磨する環境づくり、これが大きな課題になる。特に、社会に出る前の時期なのでたくさん人間と関わる中で色々なことを学んでいく、これは我々が教え、分からせるものではなく、自分の肌で感じるものだと思う。だから、この時期に人間関係が狭いというデメリットは大きい。

また、中学校は小学校と違い、部活動で学校外の人との接触が多い。その時、小規模校の生徒は、少ない人数の上、実力を伴わない場合は委縮してしまう。

- 中学校の場合、学力は学校の規模に関わらずそれほど大きな差は見られない。中規模校の本校であれば大体1学級30人後半だが、英語と数学については、1、2年は少人数に分けて授業を行っている。
- 生徒は、アンケート結果では、少人数はよくわかると回答している。やはりきめ細かい指導をするためには、少人数の方がよい。
- 三点目の小規模校の課題解決の方法については、校区は広くなるが、人数が多い状況を中学生には必要である。人間関係や部活動などの活動面においても、たくさん人間の中で学ぶことは、他に代えがたいことである。

学習効果の面では、先ほど述べたように中規模校でも少人数に分けての授業方法で改善可能である。

先ほどの話にもあったが、少ないから良い面も当然たくさんある。しかしながら、中学校を卒業するともっとたくさん人間との関わりが待っているので、中学校は規模が大変大きく影響すると考えている。

- 四点目の教師としての家庭の教育力については、私見であるが、学力と家庭との相関関係においては、やはり「家庭での心の安定」が非常に学力に繋がっていくのではないかと考えている。

実際に中学校の教師をしていて、心が安定している生徒は、授業も

しっかりと聞く。

家庭教育は、家庭で勉強を教えてもらうのではなく、基礎・基本の生活習慣を育むことや、家で安定して生活を送れているということが、実際に家庭での教育であって、非常に大切な部分だと考えている。

学力をつけることに関しては、学校は責任を持たなければならない。家庭の教育力については、心の安定に力を置いていただければと思う。

(藪本市長)

- ・小学校との違いを含めて、中学校の現場からの意見であった。大変参考になった。
- ・もう一人、中学校の立場から意見をお願いしたい。

(意見聴取者)

- ・中学校の学力の現状は、先ほど言われたように、全国学力学習状況調査について、国語が全国平均を下回っていた。
- ・中学校の現場では、「わかる授業が楽しい授業である」という考え方で、学力向上の工夫を行っている。例えば、授業が始まる前に今日の授業の目標や内容を掲示している。また、授業の終わりでは、まとめとして今日の授業の内容を書くようにしている。
- ・現在の中学校2年生からは、大学入試の方法が変わることを踏まえ、アクティブラーニングを中学校でも積極的に取り入れてやっている。
例えば、課題に対して、教師が一方的に説明をする授業は極力なくし、課題に対して4人や2人で話したり、学級全体で話し合いをする時間を取っている。

話す中で、どのように話せば相手が理解してくれるのか、また、聞く方も、自分が発言した意見について、他の生徒がどのように感じたのかがわかり、良い意味での反論やつけ加えをするようになる。

そうすると、いつの間にか話している生徒に注目する生徒や、メモをとる生徒が増えてきた。これがアクティブラーニングの効果だと考えている。

また、美術の授業でも、昔であれば絵を書いて終わりということも多かったが、今は観賞の時間があり、例えば、自分の作品の工夫したところを発表する。その後、こうしたらさらに良くなるところを他の生徒や教師から教えてもらう。このような相互評価をすることにより、集中力を高めることや、お互いの良さを認めること、生徒自身の感性の良さを育てることにも役立っていると考えている。

- ・授業以外では、読書離れが言われている。

そういう中で、どこの学校でも朝の読書の時間を設けている。

また、放課後モジュール学習として、単元が終わるたびに国語・数学・理科・社会・英語の小テストを実施し、基本が定着できるようにしている。さらに、小学校と同じように、学習の手引きを各学校で作っている。

内容は、授業の受け方や家庭での学習の仕方、テストに向けての勉強方法などの内容になっている。さらに、通知表の見方などもあるので、学期の初めには、学習の手引きを活用し勉強方法等を指導している。

- ・夏休みや冬休みには、どこの学校も補習をしている。希望する生徒だけではなく、家では集中力がないような生徒にも来てもらうようにしている。また、次期3年生は補習の時間を設けてがんばってやっている。

- ・次に、小規模校について述べる。私自身、2年前に1学年1学級の中学校にいた。少人数だからこそできることが多かった。一人ひとりに行き届いた教育ができていたと思っていた。

例えば、どの教師も、生徒の性格や学習状況を理解し、1年生、2年生、3年生の全員の生徒のことがわかって指導ができていたと思う。

ただ、クラス替えがなく、友人関係も狭まってしまうので、一つのことがうまくいかないと、生活面に影響してしまうことがあった。

部活動も、例えば野球部がないのだが何とかできないかという声があった。入部を希望しているが部活がなく入部できないことや、活動はしているが人数不足で試合に出られないことがあったので、この点はデメリットだと思う。

教師自身も免許外の授業をすることになるので、生徒自身が持っている力を活かしきれていない部分もあるのではないかと考えている。

小規模校の課題解決としては、統廃合も考えられると思うが、小規模校ならではの良いところがあるのもまぎれもない事実であるので、安易に統合や廃校ではなく、保護者や生徒の声も聴いていただき、どのように考えているかを聞く機会を設けてもらえたらありがたい。

最後に、家庭の教育力について述べる。教師は、生徒の鏡にもなるし、保護者もそうだが、子どもは家庭の鏡であると思う。

私自身、毎朝校門指導で朝の挨拶をしている。4月当初は小さな声だった生徒が、こちらから大きな声を出して挨拶をしていると、生徒の方から大きな声で挨拶をするようになった。

教師自身が生徒の模範となれるような行動や態度を取ることが非常

に大事だと思う。保護者も教師の姿を見ていると思うので、教師自身が夢を持って接することが大事だと考える。

(藪本市長)

- ・アクティブラーニングをはじめ、補習など、現場で先生方が苦勞されていることが良く伝わってきた。
- ・ただ今4人の先生方の現場を踏まえた生の声をお話しいただいた。次の3点について議事を進行したい。
- ・一点目は、小学校について。二点目は中学校、三点目は小中問わず家庭教育について、総合教育会議でどのように考えていくのか。順を追って進めていき、議論を深めていきたい。
- ・それでは、一点目の小学校について。第1回総合教育会議を行なった時も、学力の視点が議論になった。今日2人の小学校の先生方の意見をお聞きした。

中学校もそうだったが、特に基礎・基本の学習に現場で意を用いているということもよくわかってきた。

- ・しかしながら、全国学力学習状況調査で全国平均よりも下回っているということもある中で、学力あるいは地域との関わり、また規模の問題について、先ほどのご意見も聞く中で、口火を切っていただきたい。

(石井委員)

- ・4名の先生方の話を聞いて、まず小学校だが、地域の方々とのつながりが非常に強いという感想をもった。子どもたちが学校生活を送る上で、学校へ行くまでにお世話になっている人の目の垣根隊の方々との登下校中の会話や、日頃放課後遊ぶ中での態度や挨拶に関しては、垣根隊の皆さんに限らず地域の方々がいづも小学生を見ている。
- ・そういった意味で、あの子は今こういうことでしんどいようだとか、あその家庭は今こういう事情だから、学校生活、例えば挨拶に元気がないとか、そういう様子などもすべて地域の方が気付かれることも多々ある。
- ・小学校においては、小規模とか中規模に関わらず、先生方の意見を聞いて改めて、心の安定がひいては学力にもつながっていくのではないかという感想をもった。

(里見教育委員長)

- ・良い意見をたくさん聞かせていただいた。

- ・今、統廃合が「ありき」のように感じている気がする。もちろん検討した上での話だが。
- ・小規模校とか、中規模校とか、先生方の意見を聞いていて、小規模校にも大いに良いところがあり、小規模校では体育館や施設の利用にしても融通が利く、少し大きいところでは取り合いになる。そう考えると、人数は学力だけではない。小規模校の方が学力は平均すると良いという話もあった。
- ・総合的に考えると、学力、心の問題、中学・高校へと切磋琢磨しながら人間性も高めていく上で、本当に統廃合とは関係なく、1クラス、1学年の生徒が何人いれば良いだろうか。私は、具体的に言うと、先生方の意見を聞いて、20人から25人1クラスで、学年としては2クラス、50人くらいの方が良いと思っている。
- ・現状では、10人未満のところは中学校も小学校もある。何人が良いか文部科学省も県も言及していない。三木市も何人以上でない困るということは表明していない。これは難しい。言うともた、大変な議論、論点になってしまう。それを後でお聞きしたい。
- ・前回の市長の発言では、中学校は切磋琢磨させて高校・大学へ向けてやらなければならない。小学校は地域での歴史的な関係や人的・物的つながりが大にあるので、なかなか統廃合ということはできないとのことであった。我々教育委員は教育という面だけで考えるが、この会議は、やはり教育と行政も一緒になっているので切り離すことはなかなかできない。

ところが、資料の中に出ていたが、50人規模の学校は400人規模の学校の経費に比べ生徒1人当たり3.7倍かかっている。いくら予算がかかるといっても、教育はしていかなければならないが、経費についても視野に置く必要がある。

小学校は、高学年になってくると、少しは競争的な要素も取り入れてやりたいという気もする。統廃合等で予算を浮かしたとしても三木市が全て使える訳ではないのだが、その予算で、これからタブレットや電子黒板を入れていくことも考えられる。あるいはもっと充実した教育の内容を図っていく中でそちらへ使えたらどれだけ良いかと。これは難しいことだが、本当に適正な1クラス、1学年の人数について先生方の考えを聞きたい。

(藪本市長)

- ・今小学校の議論をしているが、クラスの規模も小学校・中学校共通の

課題である。国も県も決めていないので大変難しい問いで恐縮だが、小学校、中学校の現場の考えを聞きたい。

(意見聴取者)

- ・小規模校の校長と話をする機会があり、その話もさせていただいた。いろいろ議論があり、少なくとも小規模校には意義があるという校長ももちろんいるし、ある程度人数に限りをつけた方が良いのではないかという校長もいる。その中で、一人が言ったのは少なくとも10人程度。もう一人が言ったのは5人程度。私が今在籍している学校は500人を超えているので、その実態はよくわからないが、そういう意見を述べていた。
- ・私が感じることは、低学年については人数が少ないのは手厚くて良いと思う。ところが、5年生6年生など、中学校に近づいてくると、ある程度の人数が必要であると思う。そうするとどうするのかと矛盾が起こってくる。おそらく小規模校の校長たちもなかなか明確な考えを言えないだろう。

(意見聴取者)

- ・私個人のことを言うと、小学校は既になくなった瑞穂小学校の出身である。1クラス19人だった。中学校は、星陽中学校が統合したときに中学校に入った。
- ・三つの小学校から集まった人数が約100人弱。今日の自分と重ね合わせた時に、小学校の19人が多いか少ないかというのは、自分が小学校の時はそれが当たり前だった。多いとか少ないとかは感じていなかった。

今、こういう立場でいろいろ考えていくときに、小学校のときの20人規模というのは、本当にいい規模だったと考えている。また、中学校の学年3クラス100人、1クラス30何人というのは、小学校から中学校に行ったときに、人数がかなり増えたということもあったが、今から考えてあの規模の中学校というのはちょうどよかったと思う。

今本校は学年120～130人だが、中学校としては学年3クラスというのが、学年全体が見え、いいと感じている。自由が丘中は一番多かったころは学年400人近くいたが、そのときは本当に自分の学年を見るのが精いっぱいという状況になった。そういうことから言うと、小学校での学年の人数は、20人くらいは必要なのではないかと思う。

(藪本市長)

- ・小学校、中学校一律に論じることはできないと思うし、今の6－3制で考えるのも本当にいいのかと思う。

(浦崎委員)

- ・一番気になっていることは、小規模校の問題である。特に人数の少ないところについては、たぶん地域の方も統廃合などの話をされている。

その中で、小規模校は、きめ細かな教育をされていて、学力向上にも大いに生かされている。でも人数が少ないから統廃合があるんじゃないかと心配されている方もたくさんおられる。

先日、市長から小学校はやはり地域とのつながりが強いので、統廃合すべきではないという方向性を出されたときに、おそらく地域でほっとされている方もあれば、逆に早く考えるべきだと思われる方もあると思う。市民の多様な思いを踏まえながら、環境整備は慎重にしなければいけないと思っている。

(藪本市長)

- ・総合教育会議での結論が出ない中で、市議会で自説ということで、お断りをさせていただいたと言いながら、私の発言が先に出てしまったことは、5人の委員の皆様にはお詫びしたい。

私は、この総合教育会議の座長をしているが、それをもって、その方向性を誘導するものでもなんでもない。今日の聴取者の意見も参考にさせていただき、客観的ではなく、主観的に我々6人の意見を戦わせていただいて、前向きに結論を出さないと合議体としての結論は出ないので、皆様にはご協力をお願いしたい。

(松本教育長)

- ・私も学校にいた者として、小学校の経験もあるが、今聴取人の意見を聞いて、二つ思った。

一つは中学校以上に小学校はまちづくりという視点もさることながら、地域の方々と子どもの学習がずいぶん活発に行われていることである。これが、統廃合も含めてどこかに集約すると、小規模校における利点の教育がずいぶんとしにくくなる。小規模校は、地域との関係が非常にメリットであると思った。

もう一つは、意見聴取者から小規模校のデメリット解消についてご提

案をいただいた。私は小規模校については、先程言ったことも含めて、小学校は少人数指導が生かされているので残しておくべきという意見だが、デメリットの解消については考えていかなければいけない。

・意見聴取者から解消法を聞き二つのことを思った。一つは同学年の児童については限界があるということだが、今小規模校では縦のグループを作っているような教育活動を行っている。それが中規模校では、同じ時間にやる必要があるので限界がある。これは小規模校での捨てるがたい学習であり、年上の子と年下の子と一緒にいろいろな活動をするのは、成果も出ているし、大切なことであるとの認識を更に深めた次第である。

もう一つは教育委員会の課題だが、小規模校では、出張や公務は、中規模校と同じことをしなければいけないので、教職員の負担がずいぶん大きい。これは大きな課題で、県の教育委員会とも連携し、残すという方向になれば、教育委員会として考えていかなければならない。教職員の負担を減らしていく必要がある。

(藪本市長)

・5人の委員から意見聴取者の皆さんからの発言や前回との兼ね合いも踏まえて、意見、感想をいただいた。

これからは決定をしていかなければならない。多数決はこの場では取りたいとは思っていない。小学校についてはいわゆる学力という視点、それから小規模校という規模の視点。そして地域との関わりという視点。主にはこの3点に集約されると思う。

本総合教育会議としては、小学校についても、中学校と同様に学校環境整備を検討するため、後日設置する学校環境あり方検討会議に下ろしていくべきという案①、小学校については、学校環境の問題ではなく、環境は現状維持し、教育委員会として、小規模校に対してデメリットを総合的に解消し、それをさらに深めていくという方向でいくという案②。案はこの二つである。どちらに決したらよいか。

(石井委員)

・現状で先生方もかなりの努力をされているし、学力に関しても結局今から努力していく部分は大きいですが、メリットがデメリットになり、デメリットがメリットになるということは、これからの伸びしろがすごく期待される部分であり、デメリットと決めつけること自体がやはり危ないことではないか。現状のまま家庭との連携も取りながら、今後の可能性を期待したいという思いである。

(井口教育委員長職務代行者)

- ・私もまったくそのとおり。6年生の子が1、2年生を連れて登校するといった縦のつながり、まさに小規模小学校ではデメリットがメリットになる、そのとおりだと思う。石井委員の意見を支持する。

(藪本市長)

- ・他の方も基本的には二人と同じ方向でよいか。

(里見教育委員長)

- ・結論としてはそれでよい。

しかし、小学校と中学校は切っても切れない関係にあって、中1ギャップ問題など色々ある。総合的に考えていかなければいけない。

環境整備の手法としては、一般的には統廃合が一番出てくるが、やり方としては、小中一貫や義務教育学校といった手法をとっているところもある。しかし、小中一貫でも義務教育学校でも、統廃合しなければ1学年の人数は変わらない。

- ・先ほど先生方も、5、6年生になると競争、切磋琢磨する要素も入れる必要があると言われた。そういった意味で、小規模校にはもちろんメリットがたくさんあるわけだが、デメリットの解消に教育委員会も真剣に取り組む必要がある。
- ・それから、地域の方や保護者の方もどんどん変わっていくが、地域の方に大いに参加していただいて協力をいただき、地域全体で小学校をどうしていくかということを真剣に考えていかないと現状維持で残した意味がなくなってしまう。そのためには、教育委員会が良い案を考えないといけない。これらが大前提だということを一言申し上げておく。

(藪本市長)

- ・全体の中での進め方というのは、家庭と地域の関わりなどがあり、いろいろ出てこようと思うが、あとで中学校の方の議論でも一部影響してくるが、中学校で仮に何らかの形で教育環境を整備していくときに、結果として小学校、中学校セットで影響が出てくる場合はあるが、基本的な大きな方向性は、案2の方向性とする。現状を維持していく中で、小規模校のデメリットの解消を模索していく。その大前提として地域との関わり、家庭教育との関係、そういったことをつけ加えるということ

よいか。

---全員異議なし---

(藪本市長)

- ・それでは次に中学校に協議を移らせていただく。前回は、我々6人の協議では、小学校とは違って、2020年の大学入試の改正を踏まえての思考力、判断力、表現力の養成、あるいは人間関係、部活動、専任教員、そういった視点から、教育環境を検討したほうがいいのではないのかという意見が大勢を占めた。改めて今日、中学校の立場から二人の先生方の意見を伺ったところである。前回の視点を踏襲していくのか、そうではないのかということを確認したい。

(浦崎委員)

- ・私自身中学校のころにかなり大きく成長した。特に団体生活、部活動等の先輩後輩の関係の中で育ってきて精神力も鍛えられた。そういう頃に耐えてきたという心の支えが、就職して社会人になっても大いに活かされて、今があると思っている。

高校、大学、社会人へと進んでいくに当たって、思考力とか判断力とか決断力を育てていってもらいたい。そのためには、一定の人数というのは必要になると思う。もう一つ考えてもらいたいのは、地域性も含めた中で、どういう形にするか考えないといけない。

(里見教育委員長)

- ・前回の方向性でいいと私は思っている。今浦崎委員から決断力という言葉聞いた。表現力ということは今まで言っていたが、決断力は必要である。中学校卒業して高校、大学、社会と出ていくときに、自分で判断しなければならないことも教えなければならない。善悪の判断は小さい時から教えなければいけないが、決断力は社会性の中で育てなければいけない。

(藪本市長)

- ・当総合教育会議としては、もし仮に中学校について学校環境の問題に言及するならば、中学校区も具体的に明記をして検討委員会に委ねていくべきではないのかという意見が出ているので、その辺も踏まえて意見

を伺いたい。

(石井委員)

- ・先日小規模校にあたる中学校を訪問して、その感想として、どうしても少人数の授業だと、よく言えばアットホームな環境で授業をすることになってしまって生徒たちの自己主張が弱くなる。先生が見届けられるという利点はあるが、教師主導型の授業に陥りがちという印象を受けた。中学校ではそれはどうかと思う。

部活動に関して言えば、小規模だと人数が集まらないので、部活動の種類も少なくなるし、生徒たちもクラスも少ない上に、人間関係が部活動でも変わらないということは、非常に大きな問題である。社会性を育てるという意味では、多種多様な価値観に触れるというのは、打たれ強さを磨く上でとても大事である。そういうところを中学校で育てていていただきたいことを保護者として私も期待している。

(井口教育委員長職務代行者)

- ・中学校において、思考力、判断力、表現力をさらに育てるためには、創造力が必要だと思っている。創造力を養うには、一人や二人ではだめで、たくさんの人との交流が必要だと思う。

(松本教育長)

- ・中学校の意見聴取者からも話があったが、やはり中学校では部活が課題である。1学年1学級、しかもその1学級の人数が少なくなると、例えば野球であるとかサッカーであるとか、人気もあり大人数とする部を編成できなくて、他の学校だったらやっているのにうちの学校ではできないという状況が生じており、小規模校、特に1学級しかない学校の課題は部活動である。

もう一つは、教科外の教師がしっかり教えているものの、教科の免許を持った担任が配置できないことで、子どもたちの不利益になるような状況が生じている学校は、環境整備について検討しなくてはならない。

(藪本市長)

- ・前回と同じように、中学校については委員全てが小学校以上になんらかの形で環境整備は必要だとの意見である。環境整備を検討課題にあげていくということに変わりのないことを確認した。

- ・次に、具体的な進め方として、対象の中学校区はどこなのか、小規模校という定義も含めて議論したい。総合教育会議、あるいは教育委員会とすれば、こういう生徒を育てたい、それに近づいていくためにどのような手法をとっていくのかという、そこがまずぐらついたらダメであって、規模だけで決めてしまうと、道を間違ってしまう。

そういう意味では、先ほどから、表現力、思考力、判断力、決断力、創造力、いろんなことが出ているが、自立性を育てていくためには、そこには、部活動、専任教科などいろいろな課題もあるわけだが、教育環境の整備が中学校に必要なことをしっかりと発していかないと、統廃合ありきのような形でこの議論が独り歩きするのも非常に危険で誤解を生みかねないと座長として感じている。

- ・そのような中で、委員間で討議していただきたいのは二点。まず一点目は、先ほどの考え方のもとに、対象校区はどこなのか。二点目は、環境整備の手法について。統廃合ありきなのか、そうではないのか。その点について、委員間協議をお願いします。

(松本教育長)

- ・中学校で伸ばすべき学力や人間力において、1学年1学級以下では支障があるのではないかと。そういう観点でいえば、今市内で現状として中学校で1学年1学級以下、しかも全校生が100人を切っている学校は、志染中学校と星陽中学校である。志染中学校と星陽中学校については、どんな環境がいいのか検討をしていく必要がある。

(藪本市長)

- ・今の1学年1学級以下、3学年でトータルで100人を切るというのが一つの判断基準と考えられるという意見について他の委員はいかがか。今の教育長の意見は一つの案だ。定義は無いし、定義をするのが良いのかという問題もある。

(里見教育委員長)

- ・教育長から提案があったが、妥当だと考える。意見聴取者にもお聞きしたい。

(意見聴取者)

- ・そのとおりだと思う。小規模中学校は、競い合う場面が少ないのも事実だ。ただ、保護者の方や、生徒の意見も聞く機会を設けていただきました

い。

(意見聴取者)

- ・ 数字的には、1 学年 1 学級以下、100 人以下については妥当な数字だと思う。進め方についてはしっかり考えていただきたい。

(藪本市長)

- ・ これは二点目の件で関連してくるが、我々総合教育会議とすれば、環境整備の手法は、統廃合ありきという形で結論つけるのか。それとも他の手法も含めてということか。実際の進め方も今意見が出たが、保護者、地域、生徒の意見を聞きながら進めなければならないが、それについてはいかがか。

(松本教育長)

- ・ 小学校の時の議論で、教育委員長から、1 学年の人数の議論があった。意見聴取者からもコメントがあった。

志染中・星陽中を検討するに当たって、1 学年の人数も頭に置かなければならないが、意見聴取者から意見があったように、統廃合ありきではなく、小中一貫型も視野に置いた検討が必要である。

総合教育会議からあり方検討会議への下し方としては、環境整備の対象にはするけれども、統廃合ありきということではなく、三木が育てたい子ども、特に中学校についてはこういう子どもを育てたいということを地域の方々や保護者に説明しながら、意見を聞き進めるべきだと思う。

(浦崎委員)

- ・ 基本的には教育長と同意見だが、今の社会状況の中で人口増や、子どもの増加が見込めない中で、地元の吉川中学校についても少しは考えていかなければならないのではないかという思いがある。

(藪本市長)

- ・ 教育長の意見を確認させていただく。例えば志染中学校区は、1 中学校 1 小学校で、いわゆる統廃合という形になれば志染中学校は無くなる。しかし、志染中学校がなくなるということありきではなくて、一つの手法として、志染小学校と志染中学校の施設は今違う場所にあるが、それを一つにして残すのか、分離して残すのかは別にして、連携

という考え方も一つの案に入れたらどうか。

しかし、その考え方でいくと、星陽中学校区は、1 中学校 2 小学校になる。先ほど小学校の項で議論したように、原則として各地域に小学校を残していくということになった。そうすると、星陽中学校のような 2 小学校区になると施設一体型ではなく分離型での連携、そういう意味か。

(松本教育長)

・仮に小中一貫型を視野に置くとすると、星陽中学校区については、施設一体型ではなく分離型となる。

(藪本市長)

- ・総合教育会議としては、統廃合ありきではなくて、小中施設一体型か分離型かということになると、特に地域に小学校を残すということであれば、どちらかといえば分離型、すなわち小学校を現状維持しながらいかに連携するのかということになると思う。地域に合わせてということだと思うが、そういう方向も含めて我々とすればあり方検討会へ下していくこととする。
- ・今一つは志染と星陽と二つの中学校区が出たが、1 学年 1 クラス、トータルで 1 0 0 人という規模が一つのボーダーというか、基準はないわけだが、次に生徒が少ないところはどこか。

(松本教育長)

- ・吉川中である。
しかし吉川中は現在各学年 2 学級ある。平成 3 7 年には 1 クラスずつになる可能性もあると推定している。しかしながら、その状況であっても生徒 1 0 0 人の規模は維持する状況なので、今の状況では吉川中についての環境整備は検討する必要はないと考える。

(藪本市長)

- ・ほかの委員それでよいか。

---全員異議なし---

(藪本市長)

- ・それでは中学校については、小学校と違い、環境のあり方検討会議に

議論を委ねていく、ただし統廃合ありきという形ではなくて、総合教育会議として、教育委員会として、本来の目指す人材、子どもたちをどのように育てていくのかという視点から進めるべきで、環境整備がまずあるのではない。

- また、統廃合だけではなくて、小中との連携も視野に入れる中で進めていく。対象中学校区は現在のところ2中学校区ということで決した。
- ・ 続いて、学校と家庭教育との関係で、家庭教育にどういうことを先生方が求められるのか意見を伺った。基本的には、しっかりと生活習慣を家庭では身につけてもらいたい、心の安定が大事ということも伺った。学校と家庭とでのいわゆる教育における役割分担ということについて、現場の考えを聞ける非常に貴重な機会をいただいた。感謝する。
 - ・ 小学校、中学校を問わず共通した課題なので、最後に協議事項の三点目、この家庭教育の関係について、委員の意見を伺いたい。

(浦崎委員)

- ・ 各家庭によって状況は違うが、家庭の教育力というのは、子どもに1時間でも30分でも勉強する習慣を各家庭でしっかりと身につけていくことだと思う。そうすれば、学力は自ずと上がってくる、一番の早道ではないかと思う。

(石井委員)

- ・ 家庭の教育力の捉え方について、ぜひ先生方に聞きたいと思っており、今日、基本的な生活習慣の徹底ということに尽きるということを知った。しかし、それを理解している現役の保護者の方がどれだけいるだろうかという思いで聞いていた。

日々、他の保護者と接している中で、私は学校の先生みたいに学習を教えられないとおっしゃる方もいる。私は、それは家庭の教育力ではないと思う。

家庭の教育力というのは、保護者が子どもに対して心身ともに健全でいることが、子どもに学習のやる気を起こさせ人間関係をよくすることに繋がっていくのだということを知り、今日改めて先生方の意見を聞いて実感した次第である。このことを、保護者の方がもう少し理解してもらえればいいのにと思う。

(里見教育委員長)

- ・ 家庭での教育力、文部科学省でも我々もこういうが、家庭の教育力は

家庭教師をつけたり、親が教えたりすることではない。先ほどからも言葉が出ていたように、家庭での学習習慣をつけることが一番大事だと私は思う。これからそれをどのようにしていくかを我々が議論していかなければならないと思う。

・家庭訪問の時期を早すぎるので少し遅くするなどして、先生方が家庭のことをある程度分かった上で、子どもが家庭で学習する習慣をいかにつけさせるかに重点を置いて、その大切さを保護者にどう伝えるかが課題である。

それから心の安定については、お父さんお母さん、あるいはおじいちゃんおばあちゃんも含めて、円満な家庭では子どもの心が安定しているが、そこはそれぞれの家庭で違う、そこを理解してどのように家庭に入り込んでいくかというのが重要である。

その辺は、これから先生方の生の声を聞きながら教育委員会で検討していかなければならない。

(藪本市長)

・家庭教育との関係について、総合教育会議でもあえて、小学校と中学校と一緒に取り上げることに重要な意義がある。教育大綱の基本目標に力強く、家庭教育というものをうたっている。

そのような中で、現場の先生方の声も踏まえて、我々の考えている方向とほとんど同じだとの思いを強くさせていただいた。

いま教育委員会として取り組んでいる家庭教育の方向性、そして、今後、総合教育会議として、教育委員会にどのようなことを求めていくのか。そのことについて、最後に教育長に意見を聞きたい。

(松本教育長)

・いま取り組んでいるのは、全国学力学習状況調査の結果も踏まえて、三木市の子どもたちは家庭の学習時間が短い、ゲーム等をする時間が長いという傾向にある。そこで、生活習慣をつける、家庭学習は学年に応じて何分以上する、ゲーム等は家庭でルールを作るなどの取組を冊子を作って、配布して、家庭訪問や学級懇談などで担任が啓発をしている。

しかしながら、さらに一步踏み込もうとすれば、なかなか学校なり教育委員会の考えが浸透しない家庭もある。それを十分頭において、子どもが宿題をしてこないとか、学校で集中できない、心の安定がないのは子ども自身の責任ではないので、学校と家庭が手を取り合って、学校は家庭の子どもの背景を十分把握をしながら、保護者に寄り添っ

て、家庭の教育力を上げるような支援をしていくべきである。

三木市の学校にはその伝統もあるので、今後は、家庭へ一歩踏み込むことが我々に課せられた課題だと思っている。

(藪本市長)

- ・一点目の論点で論じた小学校については現状維持をする。その大前提として、小規模校のデメリット解消とともに、家庭の教育力向上への支援である。中学校においても家庭教育は、重要であるのは小学校と同様である。

したがって、今までから教育委員会として、また、現場の先生方も苦勞して取り組んでおられるが、学校教育と家庭教育は車の両輪であるので、教育委員会と学校現場とが役割を分担し連携する中で、家庭教育への取組を前向きに進めていくことについては、先ほど述べた小学校における小規模校のデメリット解消策の検討と合わせて、教育委員会に委ねたいと思うのでよろしく願います。

- ・以上三点で今日の議決事項、協議事項を終わらせていただく。長時間にわたり、意見聴取者の方々には、貴重なご意見を賜り厚く御礼申し上げます。
- ・それでは、報告事項に移るが、報告事項は先程のことを踏まえて、資料の9・10ページで、実際にこれを進めるにあたっての検討組織、あるいはスケジュールについて事務局から説明をお願いする。

(赤松企画管理部長)

(資料9・10ページの説明)

(藪本市長)

- ・先程、意見聴取者から生徒のアンケートという意見も出ているので、住民アンケートだけではなく、住民には保護者も含まれていると思いますが、生徒アンケートも入れていただきたいと思うがいかがか。

(里見教育委員長)

- ・いま現在の生徒、この時期に中学校に通っている子ということかと思う。その点は事務局に任せる。

(藪本市長)

- ・事務局でよく検討すること。ただ、先程意見が出たので、住民だけで

はないということだ。

(赤松企画管理部長)

- ・意見を踏まえて、どのような生徒を対象にするかを含めて検討したうえで実施する。

(藪本市長)

- ・それから地域部会、住民意見交換会が30年度以降になる、すなわち、一度方針案が決定されてから地域部会等を開くということだが、地域部会の立ち上げが1年後になる意図は何か。

(横田学校教育課長)

- ・地域部会を方針案の後に立ち上げるのは、何も示さないで地域の方々の意見を聞くのは難しいということからだが、実施方針の案を策定するまでに、住民やいろいろな方々の意見も聞く必要があるので、アンケートやまちづくり協議会等の方々の意見も伺うことを計画している。

(藪本市長)

- ・各委員は、そのような考え方でよいか。

-----全員異議なし-----

(藪本市長)

- ・それから、資料10ページの表で、31年度と32年度の間太い黒い実線は何か。

(赤松企画管理部長)

- ・31年と32年の太線は、昨年度策定した教育大綱の年度の区切りで、一番下の欄で示している通り、現在の教育大綱では平成31年度まで、学校の統廃合はしないという方針を打ち出している、その区切りの意味である。

(藪本市長)

- ・他に9、10ページの関係で質問はあるか。

(浦崎委員)

- ・まちづくり協議会という言葉が出てきたが、各地域では区長協議会が中心になって動かれている。地域によれば、まちづくり協議会と区長協議会が一本で動いているところもあり、各地域でリーダーシップをとられるのは区長さんである。そういうことも踏まえ、区長協議会連合会にも情報提供するべきではないか。市長のご意見をお聞かせ願いたい。

(藪本市長)

- ・同じ意見だ。併記した方がよい。

(浦崎委員)

- ・併記した方がよい。情報提供するのは大事だと思う。それが住民の意識を高めることにつながる。デリケートな問題であり大事な問題でもあるので、きっちりと情報提供していきたいと思う。

(藪本市長)

- ・その関連で事務局に確認したいが、先程、教育長から中学校について、将来的には吉川中も全校生徒数100人以下なる可能性はあるが、当分の間大丈夫だ。こういう話があったわけだが、地域のことを一番ひしひしと感じておられるのは、地域の住民の皆様だと思っている。総合教育会議としては対象校区にはないが、仮に吉川地区から喫緊の自分たちの関心事項だということで、議論したいと要請があった場合には、どのように対応していくのか。

(赤松企画管理部長)

- ・吉川地区から学校環境整備について、自ら考えたいというような声があがってきた場合は、説明会の開催や住民アンケートの実施については、協力すべきと考えている。

3 閉会

(藪本市長)

- ・これで終了予定時間となった。会議進行にご協力いただき感謝する。これからの三木市の教育を考えるにあたり、非常に意義の深い会議であった。
- ・今後、来年3月に立ち上げる学校教育環境在り方検討会議で、約1年かけ、地域や現場の声もしっかりと聞く中で、方向性を教育委員会で議論いただき、意思決定機関として総合教育会議で決定したいと考える。

- ・教育ということ、地域や保護者、生徒を含め、関係者のいろいろな考えが絡み合う問題であるので、一つ一つ丁寧に事を進めていくことが理解を得ることだと思っている。4名の意見聴取者には大変感謝する。それではこれにて閉会とする。